

俳句雜誌

令和元年九月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十二卷第九号

# 水 月

2019 9月号



# 水明全国大会

令和1.7.8  
〈於 ロイヤルパインズホテル浦和〉



山本 鬼之介 主宰



主宰と各賞受賞者の皆さん

# 水 明

第1068号

---

―歴代主宰の一句―

死を急がず曼珠沙華見れども見れども

長谷川かな女

芒野の宙や今日のみ女富士

長谷川秋子

宴には非ず月見る会議室

星野紗一

# 水明

令和元年  
9月号

歴代主宰の一句

宵宮(作品)

山本鬼之介

夕虹(近詠)

菊池ひろこ

護国寺(近詠)

鈴木康世

雪嶺讚歌 雪欄作家近詠鑑賞

五明昇

季音「雪」(同人作品)

森千代子 矢作水尾  
山中順子 ほか

10

季音「月」(同人作品)

渡辺舎人 吉澤純枝  
小倉倭子 ほか

17

季音「花」(同人作品)

田中千穂 大場順子  
山田美佐尾 ほか

22

鼓笛集(同人作品)・私の一句

現代俳句鑑賞

網野月を

28

金の鈴銀の鈴 季音月評

町野広子

30

◎水明全国大会

兼題入選句

全国大会の記

山中順子

46

32

1



☆新季音同人近詠二句

五明 昇 48

水明集

越田 栄子 正木 萬蝶  
近藤 徹平 ほか

50

水明集作品評

山本鬼之介 66

水 琴 窟 (水明集七月号鑑賞)

池田 雅夫 70

俳誌望見

梅澤 佐江 27

句集喝采

井口 俊晴 52

水明夏行

大村 節代・石山かつ子・境 延昭 75

水明夏行講評

山本鬼之介 78

水明例会報・各地句会報

81・84

水明塾・九十周年・りんどう忌のお知らせ

89・90・93

新珠賞作品募集

92

水明発展基金御礼

95

風声・後記

94・96

題字・長谷川かな女 表紙・内田恵子 カット・福田千春

---

---

# 宵宮

山本 鬼之介

葉柳に召され妙なる夜の景

月鉾に月が応ふる街の辻

祇園会や女ひと言「好かんだこ」

---

厚切りのハム白南風のカフェテラス  
与の膳の夏の料理の迷ひ箸  
物干し台は今も健在星涼し  
萬緑の森に居さうな迷ひ神  
青鳶に正体かくす大使館

# 夕 虹

## 菊 池 ひろこ

夕 虹 や 掠 れ て 読 め ぬ 羽 虫 の 句  
男 滝 よ り 女 滝 は 見 え ず 神 の 域  
月 見 草 砂 の 段 差 に 動 悸 せ り  
空 耳 に 歌 劇 の 序 曲 森 は 夏  
夏 星 の 枝 に 揺 り 籠 流 浪 の 民  
夏 星 や 海 よ り 生<sup>あ</sup>れ し ごと 哭 け り  
フ ラ ン ス パ ン 気 泡 ま で 喰 ひ 夏 盛 ん

江戸時代以降の記録によれば、立秋は八月七日かそれ以降になつていくという。八月六日が立秋となるのは今から約五十年後の二〇七二年であり、二〇九九年まで「六日立秋」が続くと知った。例えば「原爆忌」は歳時記では夏の季語だが、八月六日の広島忌は夏、八月九日の長崎忌は秋と感ずる向きもある。そして約五十年後、原爆忌は秋の季語となるのか史実に従うのか。数十年後の歳時記の心配は、未来人にまかせることとしよう。



# 護国寺

鈴木康世

夥し一言地蔵蟻の攀づ  
柏葉紫陽花の精揺らぎたつ供養塚  
身辺をつかず離れず黄の揚羽  
剥落の見ゆ大師堂濃紫陽花  
薬師堂の花頭窓へと蟻一匹  
元勲の廟は閉ざされ梅雨の蝶  
惣門を声低く飛ぶ梅雨鴉

護国寺に行く。山門の入口に小さな鬼灯市が立っていた。今日が四万六千日である事を不覚にもすっかり忘れていた。この日に寺に詣でると功德があると云う。期待しようか。

仁王門も不老門もすばらしい。左右にも見る物が多い。本堂はさすがに重要文化財だ。天蓋の大きいこと、ご本尊さまの美しいこと暫らく友と動けなかった。横で若者が熱心に経を唱えていた。私も亡くなった姉と弟の冥福を祈り一心に手を合わせた。

充実した一日を楽しく過ごすことが出来たこと、姉の俳句をやっていた良かったねの最後の言葉を胸に刻みながら寺を後にする。

黄揚羽のついと消えたる仁王門

# 雪嶺讚歌

●季音雪欄作家近詠鑑賞

五 明 昇

◇季 春（六月号）

西山貴美子

◇改 元（六月号）

茂木 和子

金容の眉すんなりと暮の春

京都の三十三間堂を訪れると、中央の天尊を中心に左右、計千体の等身観音立像（すべて国宝）の威容に圧倒される。仏像は漆箔（仏像に漆を塗り金箔を押ししたもの）で覆われ、十一面と千手で衆生のあらゆる苦悩を救うと言う。暮春の光の中、金色のたおやかな眉に心癒される想いがする。

金金に気取つてゐても蕨餅

蕨餅はワラビの根菜からとった蕨粉で造る餅の一種で、柔らかくて甘い和菓子である。醍醐天皇が好物としており太夫の位を授けたという言い伝えがあり、そこから蕨餅の異名を岡太夫ともいう。黄粉をつけ取り澄ましていても所詮は蕨餅という諧謔が利いた一句だ。

春の闇バンドネオンが息を抜く

バンドネオンは構造、音色はアコーディオンに似るが、ピアノ式の鍵盤の代わりにボタンを用いる。ドイツからアルゼンチンに伝わり、タンゴの演奏に使われる。春の闇に、空気を発音体とする気鳴楽器が一息つく景だろうか。

快晴の令和元年子供の日

五月一日、新天皇が即位し元号も令和と改元された。戦争は無かったものの、経済が低迷し何となく氣勢の上がらなかつた平成に比べ、海外留学の経験がある天皇と元外交官の皇后の誕生で、日本中が祝賀ムードに包まれた。折しも令和初のことものは快晴、国の未来を耀かせるような一日だった。

庭中に起伏の波や立浪草

立浪草は山地に自生するシソ科の多年草。茎の先端に三センチほどの独得の花穂を一方的につけ、そのさまが波頭に見立てられる。初夏の薫風に立浪草の波が寄せ来る光景はいかにも清々しい。「花博士」の作者ならではの一句である。

茉莉花の坂下り行く坂の闇

茉莉花はモクセイ科の常緑小低木でインドや東アジア原産のジャスミンの一種。ジャスミンティーやアロマセラピーなどの香料として有名で、花名はベルシャ語の「神からの贈り物」を意味し、香りの王とも呼ばれる。作者は茉莉花の咲き乱れる暗い坂道を下りつつ、その香りに溺れかけている。

◇変遷（七月号）

森 千代子

夏草は黙して語らず田は家に

小川町は、埼玉県中部、比企郡西部の中核をなす町である。外秩父の山に囲まれた小川盆地に市街地があり、その地勢から「武蔵の小京都」の異名を持ち、伝統工芸の和紙で知られる。作者の住む大塚地区はその中でもJR八高線、東武東上線の小川町駅への至近の地を占める。このためかつて農家五十戸を数えた集落も次々に住宅地へと姿を変え、田や畑は今年を限りについて姿を消したと言う。

洒落たアパート夏の太陽照り返す

田畑の跡には洒落たアパートが建ち並び、通勤客に住まいを提供している。その昔、田畑に恵みをもたらした夏の太陽が今は住宅の屋根にまばゆく降り注ぐばかりだ。時代とともにめまぐるしく変って行く周囲の景色をただあれよあれよと見つめている作者である。

用水の川は変わらず合歡の花

畦道が車道となり、お屋敷も青葉の中に沈み、付近に昔日の面影は乏しくなった。ただ、ものみな変わり行く中で、用水の流れだけが今も変わらぬ姿で作者を追憶の世界へと誘ってくれる。川端に紅色を集めて咲く合歡の花と、古き良き日々を語り合う作者が見えるようだ。

◇磐船祭（七月号）

小林萬二郎

風薫る開かずの門の国昌寺

水川女体神社磐船祭の出発地となる曹洞宗国昌寺の山門は開かずの門として有名で、欄間の龍の彫り物は左甚五郎作と伝えられる。開拓によって住処を失った見沼の「主」を彫り付けたとの言い伝えもあり、この門を楯が通ると軽くなる（龍が食う）との伝説から開かずの門になったと言われている。

水鶏鳴く張りぼての龍続く農民

磐船祭はかつて見沼の「主」であった龍の魂を慰めるための祭礼で、毎年五月四日に催行される。国昌寺を出発した一行は、二体の七メートルほどの龍の張りぼてを捧げて一キロの道を行列し、水川女体神社で神事を執り行う。神社境内には「磐船祭祭祀遺跡」が保存され、古代の御船祭から磐船祭に続く祭祀の遺構を偲ぶことが出来る。

鹿の子百合流れ滔々代用水

江戸時代中期に干拓された見沼溜井に代わる農業用水の確保のため利根川から用水が引かれ、見沼田圃の西縁と東縁の台地に沿って掘削された水路が見沼代用水。今も滔々とした流れを保ち、長い歴史に育まれた見沼田圃独自の自然、歴史、文化の継承を人々に訴え続けている。

季  
音  
雪



獸

森

千代子

百姓の蓬髪あつき昼寝醒め  
丹精の南瓜は獸に荒されて  
獸見し臭ひ雷雨が消して去る  
獸脅かすラジオの忍ぶ音明け早し  
物云へば獸の話夏最中

梅 雨 矢作水尾

梅雨湿り力を入れて燐寸擦る  
雨脚の勇みがちなる男梅雨  
空梅雨や泥吐きつづく浚渫船  
天井の竜泳ぎ出す走り梅雨  
久遠寺の鐘の間長し夏霞

一本道 山中順子

眠らない人形の眼がこはい昼寝  
湯むきするトマトつるりと丸裸  
山男冷しトマトを丸かじり  
すきな水好む草の秀糸とんぼ  
餌を運ぶ蟻の迷はぬ一本道

夏深し 山中みどり

夏深し薩摩切子に芋の酒  
揚げ浸す秋茄子の藍深まれり  
舟端に蟬の骸や汐の川  
曳かれ来し花火台船すみだ川  
金臭き細三日月や夏の果

霊山 由良ゆら女

雲海に泛く霊山の頂に  
霊山の奥をゆたかに時鳥  
老鷲に墓地の値は聞きもらす  
杉の穂に明け初む空や蟬生まる  
相席でよろしいですか欠き氷

安堵 吉住光弥

ごきぶりとて宿借す同志わが幣屋  
ごきぶり止まる次の一手を知恵競べ  
蚊に済まぬ老の血なるを恥づかしく  
庄内田圃おばこの腰に蚊やりゆれ  
病葉落つ水のそよぎを安堵とし

サザンオールスターズ 網野月を

草いきれ 石山かつ子

水を打つサザンオールスターズ聞きながら  
夏の星秒針だけが動いてゐる  
黒白の棋譜並べてゐる遠花火  
鎌研ぎの砥石のぬめり夏の霜  
ピアニストの何時ものジョーク月涼し

岩魚焼く底抜けに降る山の雨  
散弾の乾きし音や草いきれ  
梅雨晴間地図を片手に迷ひけり  
大鋸の壁に錆びたる大暑かな  
蔵屋敷の急な階段梅雨長し

苦き珈琲 石井喜恵

日 盛 大橋廸代

ひとり飲む珈琲苦き梅雨湿り  
多過ぎる釘の穴や梅雨湿り  
天瓜粉間口の狭き小間物屋  
熱帯夜畳に転がる手足かな  
枇杷ふとる野外ライブのフォービート

水琴に耳そばだてる日の盛り  
日盛の蝶見失ふ交差点  
囁きの羅漢をつなぐ蜘蛛の糸  
離るほどにかをる山百合塞の神  
日盛の野辺の送りにビートルズ

余韻 大村節代

手相見に獅子座と明かす夏帽子  
夏帽子余韻を残し風に消ゆ  
余興には秩父音頭よ夏の夕  
夏の夕長居する奴酔うてをり  
仮の世の鍵穴さがす夏夕べ

あめんぼう 栢尾 さく子

夏蓬大きな魚籠を曳きずつて  
借りものの長靴履いて蚩狩り  
子を負ひてより流さるる水馬  
工場の鉄切る音や青田風  
歡喜してががんぼの脚もつれたる

打ち水 菊池 ひろこ

打ち水や塵も匂へり小京都  
水を打つ他家の内紛聞き流し  
兜虫の脚のうごきも森の朝  
夏の星命生みたる海平ら  
早星一丁先に破裂音

日向 小林 萬二郎

木の枝に日向貪る山棟蛇  
校章に収まる蛇や神の使者  
燃えたぎる街衆の祈り祇園祭  
宵と言ひ夜つびて囃す祇園祭  
聞き流す女房の小言古浴衣

飛蚊症 五明 昇

級長を奉行に据ゑて泥鰯鍋  
公園の茂みの中の「もういいよ」  
湯上りの天使を包む天花粉  
飛蚊症に紛れ蚊の来る日暮時  
地果てて始まる海の大夕焼

枇杷すする 境 延 昭

枇杷すする唇あつき島娘  
ピストロのシエフの一品鮎の皿  
ゆりかごや乳のにほひと天花粉  
詩談義石見の鮎をほぐしつつ  
七半が夕焼雲を背負ひ来る

夏落葉 椎野 美代子

舟底と櫂生乾き夏落葉  
捨て舟に同化の易し夏落葉  
夏落葉お化け出さうな鎮守さま  
裸婦像や夏の落葉のグラデーション  
掃き寄せる母の寝嵩の夏落葉

雨上がり 島津 初花

風鈴の響きも床し南部鉄  
風鈴の休んでをりぬレストラン  
碑文字を伝うて上がる雨蛙  
草取りて老女緑陰にて笑ふ  
瑠璃色の羽を休めり糸とんぼ



梅雨晴間 鈴木康世

梅雨夕焼 西山貴美子

梅雨晴やクルス光らせ漢来る  
梅雨晴やふはりと揚がる熱気球  
白南風や富士青青と裾を曳く  
百合匂ふ柩に終の手紙書く  
今生の旅の終りの大夕焼

鉄風鈴青海原へ吊るしけり  
冷奴家伝の薬味添へてこそ  
二業地の盛り塩傾ぐ梅雨夕焼  
紐付きの下足札抜く夏の寄席  
艶聞のいつしかうすれ百日紅

令夫人 永野史代

睡蓮の池 波多野寿子

竹籠に鉄線を挿し客を待つ  
露を炊く厨に青き香を立てて  
香水の些か強き令夫人  
まなうらの一瞬光る瑠璃蜥蜴  
ソバージュのやうな髪なり梅雨湿り

読み返す晶子の歌碑やるもりの池  
百花浮く白蓮の池巡るかな  
モネも斯く睡蓮池に佇ちしかと  
命短かし桃色の睡蓮も  
睡蓮の汚れなき白池に満つ

晩 夏 服部 みどり

ほほほほと 茂木 和子

銀の地 図描き放浪の蝸牛  
海晩夏テトラポッドの肩乾き  
マネキンの倦みたる貌や街晩夏  
蚊喰鳥ネオンの骨に灯を配る  
鐘楼の晩夏撞木の緒が見えて

夏の果 星野 和葉

良き汗をかきて終りぬ朝の歩  
朝市にひと言多き浴衣掛け  
からからとこんぶ熱砂に吹かれる  
熱砂に入り二進も三進も身の動き  
つくづくと星を眺むる夏の果

植木鉢あまた伏せある梅雨湿り  
尾を立てて見馴れぬ鳥るる梅雨湿り  
マツチするほほほほほと梅雨湿り  
百日紅朝の確かな深呼吸  
さるすべり雨後あざやかな花のいろ

(順送り)

☆

☆

# 季音月

背ナといふもの

渡辺 舍人

冬瓜や曖昧といふ落としどこ  
イケメンや拙き愛の南吹く  
をりをりに母が言の葉瓜を揉む  
明易やふとすれちがふ夢のつま  
しみじみと背ナといふもの夏の鯉  
しみの月

吉澤 純枝

塩の道抜けて青田の真つ平  
貝塚に縄文の香を青田風  
七彩の匂ひあるごとと虹立ちぬ  
鯨の尾をびんと立たせる虹の橋  
末っ子に男の匂ひ鉾の月

玉 壺 小倉 倭子

今生を東の間棄つる昼寝かな  
近隣のうはさ話や夏の風邪  
迷信の然れど奇特な盆参り  
玉壺に数多詰めたき夏の星  
打上げの一本締めやはたた神

砂 浜 十倉 和子

沖めざすヨットまぶしむ砂とぶ浜  
ビーチラゲビーチ砂を蹴立てる大素足  
絵日記の海がべたつく大南風  
手に青柿投球フォーム真似てみる  
道いつぱいに戻る放牛大夕焼  
未来ある

柚木 治子

一睡も出来ぬ看病明け易し  
サングラス久方振りの照り返し  
未来ある汗光らせてホームラン  
何時か行く星を決めをり蛍狩  
廊の闇叩き落とせば油虫

半夏雨

森田祥絵

巢立鳥発ち吹かれつつ近枝に  
白南風や丘より爆音ふくれくる  
白南風や山が遠巻く千枚田  
半夏雨千本鳥居の奥の闇  
激雷に性根の抜けし鬼瓦

巴旦杏

宇田白鷺

石投げて落せしことも巴旦杏  
現し世に涙のあとや昼寝ざめ  
長靴を逆さに干して秋めきぬ  
電気柵に獣の気配秋はじめ  
撫でること句碑を洗ひぬ小暑かな

里景色

鳥羽和風

飛魚に透ける羽あり沖の石  
燕の子駅前旅館の軒泊り  
青田波下の棚田は海の域  
茅葺きの厨子より落つる百足哉  
地球儀に亀裂が走る早かな

梅雨明け

高島寛治

荒波を眼下に据ゑて枇杷熟るる  
梅雨明けの夜空を焦がす村歌舞伎  
千枚の棚田煌めく梅雨の明け  
灯を消して暫し沈黙初ぼたる  
螢飛ぶ水の匂ひを離れずに

夏深し

田寺玲子

打ち水の花見小路を下駄の音  
そぞろ行く六道之辻夏深し  
短夜の寝そびれたたく電子辞書  
水無月の波光りあふ明石の門  
風見鶏掠め薄暮の夏燕

沙羅落花

森本早苗

「頼もう」と魚板叩きぬ沙羅の寺  
沙羅落花八十路の鼓膜震はせて  
蜘蛛の囿や眼差し優し羅漢さま  
でで虫の大冒険にアドバイス  
胸像を囲む向日葵明日も晴

沖繩忌 伊藤敦子

沖繩忌昭和の針はとめしまま  
点滴や滴りのごと吾をめぐる  
強梅雨や心の澱も流してむ  
魚棚うおんたなのホース蛇のごと水撒けり  
青柿のつぎつぎ落ちて真青なる

土用波 中尾笑子

鎌倉を海より攻むる土用波  
三伏のぐつと飲みこむ陀羅尼助  
サルビアやとうに越えたる更年期  
すれ違ふ歩荷の黙や日はま  
朝焼の黒に徹して潜水艦

凌霄花 川野妙子

凌霄花やたら咲かせて女ひとり  
ひさかたの夏空見上げ深呼吸  
背伸びする子の手にあまる額の花  
祭太鼓リズムに乗りし異国の子  
異国の子別れの握手高く振り

干す 町野広子

梅雨じめり見えないやうに干す下着  
ジーパンの厚みつくづく梅雨じめり  
ゆふぐれの草の雫を青蜥蜴  
桑の実甘し鳥の嗅覚悔るな  
駆けまはる遊びの中の桑いちご

祇園会 田村みどり

やはらかき風生まれ来る青田かな  
ジョギングを軽く躲して白日傘  
熱の子の何時の間にやら庭火花  
遠火花子ら住む街はあの辺り  
選ばれて祇園会稚児の晴化粧

夏歌舞伎 井上燈女

妹の付き添ひで行く夏歌舞伎  
引き窓の義太夫狂言夏歌舞伎  
梅雨寒や男女の情念すさまじく  
むし暑き身を乗り出して観る修羅場  
梅雨しとど歌舞伎ならでの連理引き

夏 袴

丸山 マスミ

白雲の高き流れや梅雨の明け  
手花火を持ち寄り老いの花咲かす  
桐下駄の音軽やかに藍浴衣  
水攻めの堤の遺跡 紅蓮  
膝正す 侘茶の作法 夏袴

夏の雲

松本 光子

あやとりの川より覗く夏の雲  
友の忌に山鳩鳴くや夏の雲  
少年に野性育てと夏の雲  
油照り落武者のごと工夫来る  
夏雲に男しばらく合掌す

枇 杷

内田 恵子

枇杷二つ白磁の皿の影は青  
枇杷うるる境界線のあやふやに  
刈上げをせる女の子天瓜粉  
香水や悪女になれず淑女にも  
香水や少女の耳朶の輝きて

白南風

岡野 順子

十葉の花やつんつん黄を放つ  
どくだみの花を愛して抜かず置く  
堀越しに「初生よむです」とミニトマト  
このスープトマトがとても生きてゐる  
白南風に首伸ばしきる重機かな

草いきれ

藤澤 喜久

白南風に青い果実の熟るる頃  
束ね髪後より吹く南かな  
大南風片身飛ばされ夜学生  
空腹は昭和の澱か草いきれ  
行つたきり還らぬ夏の白い道

どぜう鍋

荒井 俱子

梅雨晴天硝子のビルにビル映る  
梅雨深し句帳に余白目立ちをり  
渦巻の土偶のへそや蝸牛  
隣席は年増の芸妓どぜう鍋  
どぜう鍋長寿談義にはな咲かす

風の音 池田雅夫

三秋の先陣きつて山の風  
秋めくや半音上がる風の音  
庭先の花を束ねて墓参かな  
手花火の児にそつと手を添ふる兄  
鯛の誇らしく鳴き揃ふ村

夏もやう 井関礼子

空梅雨をしびしびと鳥物申す  
ローカル車青田を分かち過りけり  
峡に棲み朝な夕なの夏の川  
緑陰や時代に遅れ生き行くも  
子の呉れし日傘長柄を重宝す

栗の花 加藤むら子

人も道も変り変らぬ栗の花  
月曜日人の影なき滝見茶屋  
熱帯夜通り過ぎたる救急車  
山里に薫る宝石百合の花  
免許証返納ゆつくり夏木立

三丁まち 霜中冬至

師の遠く令和元年合歓咲けり  
先人は距離を残して半夏生  
焼鯖はこんがり夏色三丁まち  
水打つて狭さ具合の郭みち  
ナイターを炬燵に入り見る不思議

梅雨夕焼 川崎道子

お百度の紙縫まだ掌に梅雨夕焼  
側室の墓は小振りに梅雨寒し  
朝ぐもり小抽斗より母子手帳  
日雷おいてきぼりの子のシャベル  
夕焼の海向くボート部遭難碑

☆ ☆

# 季音花

七八七

田中千穂

七変化八百屋お七の塚に沿ふ  
鼻欠けの狛犬の「阿」青楓  
円座からはみ出す尻や蕎麦三枚  
白南風を通す座敷や江戸切子  
母からの羅いまだ畳みたる

白南風

大場順子

白南風や出航を待つ練習船  
白南風やガラスの船に波の音  
むらさきの解けて今朝の花菖蒲  
蚊を払ふ手足は持たぬ野の仏  
幼名で呼ばれ振り向く螢の夜

雷鳥

山田美佐尾

近々と雷鳥を観る山ガール  
昼寝覚写経の夢に足痺れ  
緑蔭に研師砥石に水伸ばし  
緑蔭や石灯籠の干支並ぶ  
祇園会や丸太ん棒で辻回し

鮎解禁

森川義子

生家まで一直線の青田道  
草いきれ大股で来る測量士  
待ちに待ちたる四万十川の鮎解禁  
先導の稚児の鉾待つ昼下り  
昼寝覚落丁のごとドラマ閉づ

旅の風

井上玲子

蕉翁を偲ぶ勿来や風薫る  
潮騒の棚田百枚夏燕  
水打つや踏石に浮く流水紋  
一番星と曳き合うてをり兜虫  
テノールの甘き歌声枇杷太る



千枚田 松宮保人

白山の頂白く青田波

露天風呂燈台赤き夏の海

夏の海広がる視界船の点

蓑にさへ隠る棚田や草茂る

草刈るや海へ傾る千枚田

カサブランカ 野口和子

一輪を挿して忽ち百合の家

散歩待つ犬の気だるく日の盛り

百合の香にふと止まりたる刺子針

香り吐くカサブランカの息聞こゆ

日盛りや客待ち顔の理容院

晴れる 井口俊晴

子の服に日向の匂ひ梅雨晴れ間

朝顔の蔓の長さを絵日記に

忽然と沙羅の花散る夕べかな

夕焼にねぐらを求め鳥騒ぐ

眩しきは熱砂の君のビキニかな

青 宮崎雅訓

青梅や餓鬼大将に戻る夢

昼間酒飲むか飲まぬか柿青し

青田波畔はお隠れ通学路

保育士の声は青葉か園児添ふ

夏の夜の夢や青春恋一途

雑草 秋山冷子

声あげて伸びる雑草男梅雨

すいと来て着崩れ直す夏のれん

撫でて叩いて心音さぐる大西瓜

竹の皮脱ぐスーツの似合ふ子に育ち

大夕焼影のなくなる迄遊ぶ

夏落葉 松山清子

新しき靴履き下ろす梅雨の明

梅雨明や軽やかに舞ふ次郎冠者

開幕のベルに止まりし扇かな

故郷の弟達者桃届く

夏落葉祢宜の袴の裾捌き

イケメン 鈴木みや

天ぷらを向日葵色に揚げる父  
大通りさけてイケメン日傘さす  
暗号を背中に書いて夏休み  
病む人の一語の重し日の盛り  
かき氷食べてる子等のしびれ顔

草いきれ 福田 藤十郎

かつての河岸を埋めつくしたる草いきれ  
草いきれ生家も遂に空き屋敷  
早苗饗や兎らも混じりて車座に  
畦道を転げ落ちさう三尺寝  
草いきれ最後の梵音生家閉づ

燕の子 中野 疆

仏桑花一輪の朱に今日始む  
フィナーレはきらめく屏風海花火  
待ちかねし親急降下燕の子  
買ひ来たる少し色濃き夏帽子  
梅雨寒よ室内楽のよく響く

夏料理 上戸 千津子

久々の友と即行夏料理  
桑の実よ遠きあの日に逢ふ心地  
古里に心騒めく夏祭  
梅雨寒やジーパンの破壊まだ解せず  
老鶯の姿は見せず声近し

合歡の花 西浦 千枝子

合歡の花 獣道への道標  
曇天や目覚めの遅き合歡の花  
青田道乗客ゼロの路線バス  
手に馴れし針と鋏や浴衣縫ふ  
苦手な手芸一針刺して梅雨あがる

早星 福田 千春

夏星や靴音早るフラメンコ  
蠍座の姉は手強し早星  
星涼し湯宿の下駄をつつかけて  
雷や亡者目覚めて踊り出す  
白南風が一助気鬱といふ病

白鳥座 菅原知子

娘嫁し軒に夏星生まれたり  
少年の指の先なる白鳥座  
箱根路の登山電車に添ふ紫陽花  
鉄棒のくの字に曲がる日の盛  
松葉杖はづし一步にみなみ吹く

文字摺草 後藤綾子

文字摺草おろされし児の歩き初む  
長雨に庭の藺草の生きかへる  
合歡の花水琴窟の音幽し  
新築の家に若竹新家庭  
空つぽの犬小屋一つねむの花

星涼し 梅澤佐江

懐かしき人待つパリの星涼し  
夕星や肺の奥まで青田風  
お近付きにまあ一杯の冷酒かな  
五感みな涸れ尽くしたる熱帯夜  
極暑かな元に戻れぬ迷子石

心をちこち 加藤草太郎

雷いかづちの関八州の闇を裂く  
蓮の花ひらきて天地明け初むる  
定めなき心をちこち夜の秋  
刈り込めば石を噛む音草いきれ  
湯上りの女が連れを待つ素足

箱眼鏡 矢島清

緑茶飲む八月の山傾けて  
船遊母の呪文でなほる傷  
箱眼鏡浜に太古の石拾ふ  
譲り合ふときの一言踊りの輪  
朝は白夕べに変はる醉芙蓉

蓮の花 野平美紗子

朽舟の水漬く泥沼紅蓮  
白蓮や雨を渡りて阿弥陀堂  
桁着丈余りし母の浴衣かな  
アライグマ出ではや枇杷の種降らす  
虫愛づる姫の化身か黒揚羽

梅 雨 明 松 井 由 紀 子

つぎつぎに気負ひ立つ草梅雨明くる  
花の殻負うて暮出る雨あがり  
梅雨明けや葉注す目をよく開き  
御手洗に小さき青空梅雨あがる  
梅雨明けや寿宴の案内貰ひけり

水明の記事掲載他誌より転載

『鳩の子』(第36号) 6・7月号

結社誌を訪ねて 岩出くに男

鍵穴の中まで抉る空つ風 山本鬼之介

関東と関西ではいろいろな違いをいわれるが、関西人は本  
当の空つ風を知らないといわれる。関西でも冬に寒い北風が  
吹く事はあるが、関東のそれとはものが違うといわれる。道  
路の舗装が今のように進んでいなかった時代であれば、関東  
ローム層の細かい砂塵を巻き上げ目もあけられなかったであ  
るうことは容易に想像できる。それを「鍵穴の中まで抉る」  
という表現をすることで、関東の空つ風を言い表す。鍵穴の  
ような狭い狭い処へも抉り出すかのように風が吹き込む。こ  
れぞ俳句の魅力。

最近の名句集を  
探る

座談会  
今泉康弘  
齋藤慎爾  
筑紫磐井  
野口る理

大牧広  
『俳句日記2018  
そして、今』  
高橋睦郎  
『季語練習帳』  
中島鬼谷  
『茫々』

青木亮人新連載スタート!

★巻頭三句

今瀬剛一

鈴木明

井上弘美

安田畝風

柴田多鶴子

山崎千枝子

★今月の華

高橋健文

飯田晴

★その時、俳句手帳

尾池和夫

★俳句と短歌の10作競詠

岩淵喜代子

伊藤一彦

★好評連載

網中いづる

SEASONAL  
KALEIDOSCOPE

筑紫磐井

俳壇観測

坂口昌弘

忘れ得ぬ俳人と秀句

藤村公洋

俳句のつまみ

二ノ宮一雄



Haiku Shiki

2019年9月号

8月20日発売  
定価1000円(税込)

http://www.tokyoshiki.co.jp/ 東京四季出版

〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

# 俳誌望見

梅澤 佐江

## 「春燈」

令和元年六月号

通巻八七一号

主宰 安立公彦

発行所

東京都墨田区

昭和二年一月、安住敦・大町礼が東京で創刊。師系久保田万太郎・安住敦・成瀬櫻桃子・鈴木榮子。「俳句の生命はひとへにかかつて余情」にある」を精進の理念としている。月刊。(二〇一八年俳誌要覧より)

額装に桜草の植物画仕立ての表紙は、敦の「花鳥とともに人生があり風景のうしろに人生がある」を彷彿とさせる。

「安住敦の句鑑賞」各一句ずつ燈下集会員による鑑賞。

来し方に悔なき青を踏みにけり

石田 康明氏鑑賞

眼葉さす落花を仰ぐさまをして

木村みどり氏鑑賞

石田氏と木村氏の鑑賞は、先師への尊敬とその叙情性の系譜を引き継いで行く覚悟を述べている。

燈下集は、主宰も含め一〇九名の自選作品が五句ずつで、

「余言」として主宰の一〇句選のうち五句を紹介。

こころ貧ならず北窓開きけり

松橋 利雄

さす手より引く手に春の愁ひかな

中村嵐楓子

点し合ふこころの明かり冬牡丹

小張 昭一

彼岸会や庭の花との暮参り

小菅 礼子

母に似る後ろ姿や目借時

豊谷 青峰

一句目の主宰選評より「こころ貧ならず」が善く効いて

いる。毎日を誠実に生きることが、何よりも自分自身に対する律儀の思いと言えよう。「北窓開きけり」にその思いが及んでいる。

当月集（主宰選）五句ずつ三五名、春燈の句（主宰選）は四句及び三句ずつ二六一名の力作より五句を紹介。

アネモネの香りを羽織る妻のみて

中澤 弘

交々の道へ影引き卒業子

近藤 真啓

苗札の一年一組大きな字

佐藤まさ子

母逝きてはや若草の句ひかな

農野憲一郎

コサージュの母眩しくて入学児

向井 芳子

〈春燈賞受賞作家・特別作品30句〉二名、持田信子氏「ぶらり横浜」持田信子論を小張志げ氏と宮崎洋氏が、平沢恵子氏「春日」平沢恵子論を中野さき江氏と片山博介氏が、抒情からの余情味溢れる句と来し方を讃辞している。

各地句会巡り(4)「春燈鎌倉句会」の活動状況と作品集、当月集・春燈の句を読む(四月号より)近藤牧男氏、エッセイ、俳句の花つれづれ(8)、特に巻末頁、主宰の「五風十雨日録」は非常に興味深く読ませて頂いた。

驚いたのは、「春燈都道府県コード表」で、一都二府四三県北海道、台北、ニューヨークまで会員がおり、総会員数四〇五名、インターネット句会も毎月行われている事である。創刊以来同人制を布かず、個性尊重の方針で、一貫して論よりも作品重視の姿勢を貫き、「歴代主宰の句を引き継ぐ叙情性を志す」に、成程、現主宰の作品欄が無いのも頷けるような気がした。

# 現代俳句鑑賞

網野月を

俎のパイナップルの絶対値 秋尾 敏

〔俳句四季〕7月号・パイナップルより

歪な円筒形のパイナップルは俎上では切りにくいものだ。

上と下を切り取って俎上に円筒を立てるようにして置いてから周囲の亀甲模様のような外皮を削ぎ取るようにする。その際には上と下を切り取ってあるので俎上では動かいのである。その様子を「絶対値」と言っているのだろうと筆者は考える。上五の「俎の」の「の」は「俎の上の」の省略されたかたちであり、中七の「……の」は「の様子を喩えて表現するなから」という意味になるのである。俳句での省略は、苦い菓をカプセルに詰め込んで呑み込み易くするのに似ている。飲み込んでしまえば効果抜群なのである。

パイン食ひ達磨落しを久々に 山本鬼之介

〔俳句四季〕7月号・パイナップルより

上五の「食ひ」後の切れは連用形で作り出されて、座五「久々に」の後は、副詞の後の動詞「遊んだ」の省略という方法で緩い切れを作り出している。中七は「……を」を用いてしっかりと座五へ繋げている。句意は日常のテーマであり、強い切れは返って不釣り合いである。テーマに即して切れの

軽重を巧みに選択している。

何でもネット化どこでも猫の恋 中嶋 三雄

〔俳句四季〕7月号・「本佐倉城」より

はじめの「何でも」が絶妙である。ネットは時空間の制約を受けないからだ。それに対して座五の「猫の恋」は季語であり時季を表して一定の時間を設定しているし、そこから恋猫の声が聞こえて来るわけだが、それにしても猫は動物であって空間に生きているのである。「ネット」と「猫」の押韻も楽しい。猫の恋は何処でもあるが、人間のネット化の方が恋猫を超えて空恐ろしい気がする。

はなびらを詰め込む貴重品袋 久保 純夫  
油断かな櫻が蒼く死んでゆく  
止め処なく流れる櫻あなたよ

〔定点観測〕「ISUMI・MUSASINO」より

本句集は「久保純夫第12句集・定点観測―櫻まみれ―」と題されている。標題の通り全句が櫻のテーマに沿って作句されており、将に壮観である。作者本人は「櫻まみれ」と言っているが、その自己評価自体が作者の意図するところを十分に語っている。

初句は句意も座五の「貴重品袋」のことばの選び方も決して他が真似ることの出来ない作者ならではの境地である。五・四・八のリズムは独自だが後半の十二音が滑らかで違和感が全くない。このようないわばほっこりした句と共に二句目のような句もある。この「櫻」は樹のことなのか？「花」のことなのか？上五の「……かな」は切字の「かな」なのかも知れないが、疑問の助詞＋詠嘆の助詞であるところの「かな」にも読める。作者もどちらでも読めるように曖昧さをのこして叙しているように筆者には読めてしまうのだ。三句目の句は花筏のようにも考えられるのだが、確証は無い。ただ「……櫻」に対して座五の「あなたよ」と字足らずで収めている。作者は自分が見定めたモチーフに肉付けして、イメージを膨らませるだけ膨らまして、後に贅肉を削ぎ落とし、ぎりぎりまで昇華し尽くして句作りをしているように考えられる。その結果としての「あなたよ」なのであるから、字足らずがリズムの不足感を感じさせないのだ。この句の証明するところである。それにしても「あなた」は一体誰なのか？作者のベアトリーチェなのかも知れない。

続けて同句集の「KUMANO・YOSINO」より二句を挙げてみよう。

立ったまま死んでいるなり朝櫻  
ゆるゆると櫻に隠れ子を産みに

一句目は前述した句と同様に「死」の文字が入っている。誰が死んでいるのかは不明だが、立ち往生ならば、弁慶を惹起してしまう。他にも立ったまま死んでいる生物はあるだろう。植物ならば立ち枯れているものの方が多いかも知れない。

そうした「死」の景と座五の「朝櫻」の清新な生を取合せにしているところに一種の緊張感と共に、輪廻的な二者の関係性も感じるのである。二句目の句は何ものかが「櫻に隠れ子を産みに」来ているのである。助詞を「に」「を」「に」と三度用いて丁寧の意味の方向性を確定している。その表現の丁寧さの中で言おうとしていることは、「隠れ」の叙述である。「隠し」ではないのだ。つまりこれから隠すのである。行動の主体である何ものかについても、何のために、またはどうして隠すのかの手掛かりも叙述されないので解釈は読者の想像に任されている。多少乱暴な書き方ではあり、投げやりな感さえするのだが、叙述されている事だけでこの句が成立していることもまた然りなのである。行動の主体も隠す理由も説明せずに句が理解されてこそその句なのである。

### 青鞋のさくら三鬼の櫻かな

同句集の「TSUYAMA・MIMASAKA」に収録されている句である。阿部青鞋のさくら（例えば「のこのこと幹をつたて散る桜」）があり、西東三鬼の櫻（例えば「大仏殿いでて桜にあたまる」「暗闇に海あり桜咲きつつあり」）がある。そして著者久保純夫の櫻がこの句集に在る。この句集は「定点」すなわち櫻を透して見る全ての世界を表現した句集なのである。他に

おもむろに十指を解く花疲れ  
夜櫻の指の先から漆など  
指解き腹を緩めし花疲れ

などがあり、圧巻な句集である。

# 金の鈴銀の鈴

◆季音七月

町野 広子

草笛をぶつきら棒に童唄

茂木 和子

草の葉を丸めて笛のように鳴らす。素朴な音色かと思うが筆者は鳴らしたことも、多分聞いた覚えもない。名人ともなると、音階のある曲を吹けるらしい。掲句の人物は、そこまでの名人とかではなく、我流で楽しんでみると見られる。中七下五からは、孫や近くの子供達に吹いて見せているのか、ぶつきら棒が面白く自然体の人物が見えて来る。

何某某と名乗る男へ新茶くむ

大村 節代

先ず導入の三文字に心が動いた。この男性は一体何者？なのか。夫又は子供達に関わる知り合いなのか。何れにしても印象の良い人物なのである。大いに納得の上座敷へ通す。掲句から想像するに（多分若くはないと思われるお客に）作者が用意したのは、とって置きの新茶。瑞々しい色と香りそしてほんのり甘みさえ感じる味とが伝わる。

臍から臍へわが身揺らぎをり

永野 史代

春の夜のものみな朦朧とした感じ、実体ではなく感覚なのである。作者は数年前から体調を崩し、何かと大変な時間を

過されている。掲句は、そんな作者自身の心を詠んだ物と察する。心の機微を詠むに右に出る人はいないと筆者は思う。思慮深く、他人に優しく、絶えず気配りを忘れない人なのである。生かされている人生も臍のような物かも知れない。

再会の高々あぐる白日傘

柚木 治子

再会のお相手は何方でしょう。うきうき嬉しい方に違いな。雑踏の中で見つけた相手は遠くからでもすぐに見分けられる仲なのである。思わず高々とあげた日傘。向こうからも日傘か手で合図が返される。この後お食事や話に花が咲き、時の経つのも忘れて過ごす。作者の明るいお人柄にその様子が目に浮かぶ。当然次の再会を約束した事であろう。

袋回しの果の雑魚寝や明易き

十倉 和子

吟行先での景を詠んだ一句。体験者にとっては充分に理解の出来る光景。正規の句会後の食事やお酒で暫し充たされた皆が部屋へと席を移し、袋回しの試練が始まる。次から次に回って来る袋に即席の句を入れる。何だ彼だ言いつつも出来るのが凄い。酔いも回りくたびれ果てて欲も得もなく寝入る中七が言い得ていて、季語が動かない。



青梅をきちきち洗ひ律儀者

岡野 順子

青い梅は見ているだけで強い生命力を感じる。梅酒にでも漬けるのであろうか。若しかしてご自宅の庭で収穫された物かも知れない。立派な青梅を洗う「きちきち」は律儀者にも通じるが、梅を洗う仕事や音にも聞こえ面白い。生活の風景をさらりと詠まれ、流石ベテランの順子さん。

子の耳に遊ぶ後れ毛街薄暮

荒井 俱子

若い女性の袷足の後れ毛には、ほのかな色気さえも感じられるのだが掲句の場合は子供の耳の辺りのそれなのである。ポニーテールのように結んだあとにはつれた髪であろう。「耳に遊ぶ」に少女の初々しさや動作も感じられる。又、見守る母の眼の優しさやいとおしさも伝わって来る。

麦秋や入り日追ひ行く鳥の群

井上 玲子

まるで一枚の絵を見ている様な一句。上五で麦秋を確と強調し、夕暮の風景を見事に描写している。

群れているのは何の鳥であろう。彼らは入り日を追っているのではなく、その方面にある畦へと戻るのである。筆者の住む辺りでは、入り日の反対の山へ帰る鴉の群が見られる。「花鳥風月」作者の豊かな感性に触れた。

少年が青年になる聖五月

菅原 知子

君にまだ言えぬことあり犬ふぐり

この二句を色に例えるならば私は即座に青と答える。一句目少年が大人に。少しづつ世間に染まって行くのであろうが、季語の持つ清々しさが青年の一途さと、未来への希望に繋がる。二句目群生の犬ふぐりの青が雑草の逞しさと愛らしさを伝える。まだ言えないこととは何？きつと深刻な事ではないと思う。二句共に若々しい感性の未来への明るい句である。

きのふ水張るやたちまち今朝植田

福田藤十郎

田の事の知識がなく分からないが、苗を植える為水を張り早苗が植えられる。きのふとあるが、多分何日か前に水田となり、そして一日で植田になったのであろう。今朝見た時には水田だった所に夕方通れば植田になり驚いたのである。

この時期には、水田と植田が入り交じっているのが見られる。秋の実りを祈るばかりである。

風に未だ慣れぬ植田のいとけなし

加藤草太郎

病床に聞く常ならぬ瑠璃鵝

一句目田に植えられたばかりの苗が風に揺れている。薄緑の見るからに弱々しい苗に心を寄せる。幼子を見守る様である。二句目、大病を経験された作者。神経が研ぎ澄まされて不安の中で聞いた瑠璃鵝の声に何かを感じる。それはきつと励ましの声であったのだろうと、筆者は確信する。

二句共に、いつも優しく愛情深い作者のお人柄が大いに感じられる。

山本鬼之介 選

水明集

ビー玉の中に天と地青嵐  
夏草の日毎に闇を深くせり  
月光に影を浮かべし女郎蜘蛛  
ウイスキー樽に眠りぬ麦の秋  
形代の燃えて天へと帰りゆく

熊谷越田 栄子

横浜 正木 萬蝶

甘噛みの指つらつらと慕の鳴く  
明易や廊下の長き妻の里  
洗礼の稚のブロンド薄暑光  
古書市に彼の初版本夕薄暑  
ホスピスの空室待ちぬ明易し

葉桜や瀬音ゆかしき峡の宿  
風薫る迎賓館のファンファーレ  
呼び鈴に見えぬ人影慕

行田 近藤 徹平

せせらぎの風を味はふ鮎の宿  
「はやぶさ」の右も左も麦の秋

さいたま 保坂 翔太

門跡の屋根に迫り出す若楓  
正眼の乙女の気合ひ鉄線花  
遠青嶺棚田の水の満々と  
夕明かり植田の中の散居村  
畝立ての鋏にもんどり打つ蚯蚓

鴻巣 大塚 茂子

逆転の大ホームラン麦茶飲む  
蓮開く静寂いやます沼の面  
月の夜や折戸に光る蜘蛛の糸  
麦秋や齒ばかり白き転校生  
さくらんぼ一人ベンチに初潮の子

川口 野田 静香

舟を押す佐原の風や夏柳  
ため息も都電に乗つて大南風  
荒南風や廃舟老ゆる船溜り  
梅雨夕焼光の届く栄螺堂  
指揮棒のひと振りを待つ梅雨の明

母の日や女ひとりの欧羅巴  
母の日のことさら似合ふ割烹着  
さよならを言つて日傘を振る女  
姉さまの明日は嫁ぐ日青田風  
眺むれば扇広ぐる青田かな

さいたま 渋谷きいち

時の日や指先で聴く己が脈  
蟻地獄放りあげたる闇の砂  
茅葺の崩れむばかり著我の花  
本堂に「波羅蜜」の額風青し  
ほどほどにうつ合槌を穴子飯

さいたま 曲淵 徹雄

蓮の花影を映して池しづか  
上州の風に波打つ麦の秋  
畑隅に埋む石仏麦の秋  
突つ張りと糊のききたる宿浴衣  
蜘蛛の囀の耀うて居りあるじ留守

高崎 原田 秀子

鰻屋のうの字の太きさくらん旗  
赤信号待つ眼差しに南風  
寅さんと鰻に会ひに柴又へ  
栄転の夫への褒美花火舟  
待たされて待たされて食ふ鰻かな

新 暦文

巫女の打つ太鼓の音や春深し  
かげろひて太極拳の老夫婦  
パリコレの細身の美女の春日傘  
青嵐波濤を越ゆる連絡船  
麦秋や背伸びして見る海の色

さいたま 日高 徹

初恋の味より甘きさくらん旗  
碑や大名屋敷の木下闇  
住職の声よき読経蟻地獄  
子供らの穿り返す蟻地獄  
巧妙な振り込め詐欺や蟻地獄

東京 太田 絹映

襟を抜くうなじの湿り薄暑かな  
梅雨寒に羽織る一枚傘の内  
見返りのひと立たせたまき夏柳  
行く先を風にまかす夏柳  
梅雨茸を蹴りて智恵子の山に入る

青木 鶴城

その色にニンフの群れを錢莖  
頭を雲に隠す霊峰山開  
あどけなさ残る少女や花石榴  
蝸牛道を外れて踏まれけり  
道連れを待つこと久し蟻地獄

さいたま 宮崎チアキ

夏柳「銀恋」遠くなりにつけり

女学生の手もる讚美歌枇杷太る

水草に目高の卵知らぬ間に

五月雨や十年日記拾ひ読む

蜘蛛走る網の振動感知して

さいたま 加藤でん治

伊予 向井 章子

風薫る旅立ちを待つトランクに  
大雁塔五月の闇に浮かびをり  
雲の峰古唄に残る背なの紅

新能星降る森にただ鼓

闇にこそみかんの花の在りどころ

泥鰌鍋酔へば始まる嫁自慢

煩惱はまだまだ盛ん泥鰌汁

蚊の声や覚えず叩く両の頬

焼酎や今は忘れし革命歌

江戸前の穴子割かるる屋形船

染谷 正信

熊谷 神田 治江

泰山木の花は歳月づしりおく  
農に老ゆ夫婦で愛づるさくらんぼ

蜘蛛の囀の揺れてざんげは風が聞く

紅蓮のいのち溢れて匂ひけり  
麦秋の陽の奔放に疲れをり

芒種なり一村水の匂ひかな

穴子寿司造花のごとくガリ添へて

白焼の穴子辛口地酒かな

瀬戸内の漁船の水脈や薄暑光

眼下一望眉山山頂青葉風

上尾 横山 君夫

東京 石田 慶子

来ぬ人にメール打つ指薄暑かな  
降り立ちて監視カメラの街薄暑

ポケットの小銭転がる夕薄暑

つまづいて筈見つけ自慢の子  
ハーモニカ一音外れ梅雨に入る

青嵐峠の茶屋に詫状が

打水に蕎麦屋の暖簾はためけり

安曇野の水光り行く花葵

紫陽花や運動靴の泥塗れ

草刈を終へるや青き香をのこし

さいたま 田中 章嘉

草加 河野はるみ

時の日の平和の鐘や坂の町  
時の日にオルゴールの螺子廻しをり

鈴蘭を振り返りまた振り返る

余所行きにあれこれ惑ふ薄暑かな

喉越しのいい酒交はす夕薄暑

青嵐子等の身長壁にあり  
邂逅の女絵になるサン格拉斯  
水菓舐め参道を行く美女二人  
葎切の騒ぐ隣りや合戦図  
毘の旗を揺らす川風夏の朝

さいたま 橋本 京子

隣人と挨拶交はず網戸越し  
道草を食ひ桑の実を喰ひにけり  
妙齡の左利きなり夏料理  
蟻どちのコンクリートを穿ちをり  
軟膏のうすき青色梅雨しとど

東京 石川 理恵

水平線を辿り奥能登雲の峰  
ひようたん島に出会ひし旅や栗の花  
能登の山低し白波立葵  
にがり買ふ日焼け男の笑顔かな  
千枚の青田を行かば行き止まり

若狭 飛水 鼓

熱の子をとにかく寝かす梅雨の入り  
声枯れをしぼし忘れて水羊羹  
原稿の締切迫り夏布団  
義母の待つ家が近づく青田道  
母がまた歳を重ねて濃紫陽花

平塚 丸屋 詠子

草笛や昭和平成遠ざかる  
園児等の散歩の時間薔薇の道  
名水に沈む饅頭夏初め  
青葉濃し水面にゆらぐ錦鯉  
週間天気予報見てより更衣

山崎 郁子

夏落葉気の先き走り八十路かな  
新茶淹れ二人静かに誕生日  
篆刻の刀の響きや風薫る  
留守電に懐かしき声夏来る  
ほどほどに降るはよきなり初夏の雨

さいたま 水野 興二

貰ふ風香水の香の仄ときて  
香水の瓶を透かしつ長電話  
香水や回転ドアを押してより  
法衣脱ぎ裕次郎張りのサン格拉斯  
遠のきし夫との距離やサン格拉斯

さいたま 森 和子

置屋あとなほ粲然と花ざくろ  
薫風や遠目に若き草野球  
風薫る野原歩めば浮遊感  
低音の読経くぐもる梅雨の入り  
友と汲む新茶は和菓子引き立てて

熊倉千重子

捨畑を低くゆらゆら梅雨の蝶  
ラッパ飲みす部活の子らの麦茶かな  
大胆な夏服えらびときめけり  
ドライヤーかけたき雨後の夏柳  
夏服の眩しき附属中学生

さいたま 西幅 公子

お三方の師の忌なつかし風知草  
神饌のひとつに青梅光りをり  
水無月の陽に透く果実丸かじり  
犬散歩夜目に浮き立つ半夏生  
握る手を開いて見せて天道虫

伊藤 愛子

畳まれし想ひ出ひらく母の日よ  
咲き誇る紫陽花に会ふ回り道  
片雲や静もる村の小青田  
慈しみ安堵を仕舞ふ夜干梅  
母の日や母の知らざる齡越ゆ

さいたま 秋本カズ子

葉柳や三味の漏れ来る向島  
葉柳や頬を優しく川の風  
よく響く庭師の鉄梅雨晴間  
霊山からの生の映像山開  
檄飛ばす打撃コーチのサングラス

笹本 啓子

借景の林泉渡る南風  
一湾の波を一つに大南風  
鰻焼く待つ間の煙も馳走かな  
石垣に矢弾の跡や大南風  
地下鉄やたたむ日傘にほてりあり

川口 田村 節子

梅雨闇や魍魅魍魎が峠越ゆ  
梅雨ごもり音やはらかにギター弾く  
梅天や天地四方を埋め尽す  
梅雨もよひ茂る樹木の深呼吸  
夜もすがら雨樋の音梅雨に入る

藤岡真知子

獅子舞のやうに枝揺れ大南風  
人をらぬ回転木馬南風の園  
栄光の選手の汗の輝きて  
鰻の日厨の妻の声弾む  
デパ地下も土用うなぎの声高し

さいたま 塩野 久子

薔薇咲かせ気分は貴族テイタイム  
肩たたき券作る子供や母の日に  
白鷺の一片を容れて青田波  
パラソルの白きレースの中の顔  
一本の日傘の中にある夫婦

新井 孝麿

片恋や返しそびれのハンカチーフ  
太公望餌の蚯蚓に及び腰  
熊除けの鈴を新たに山開  
柔道着の汗の背重き猛稽古  
朔日の入山届やまびらき

さいたま 大槻 瑳蘭

山寺や読経かすかに五月雨  
五月雨や読書三昧山の宿  
人恋し主なき家の梅雨茸  
日本間に予期せぬ客の青蛙  
宿の朝水玉揺れり蜘蛛の糸

さいたま 村杉 清吉

梅雨晴れの庭に影なす隣家の木  
麦の秋映し絵のごと版画彫る  
茶トラ猫目高の列に水弾き  
目高すいすい花嫁行列のごとく  
夏服とシヤポーできめる髭おやし

梅澤 輝翠

薰風や鼻の差競ふ牝馬たち  
蔵町の漆器の店や花ざくろ  
早朝のハワイ帰りや新茶の香  
新茶含み眠気ゆるりと解きゆく  
今はなき彼の尖塔や風薫る

山口 富子

葉柳や客待つ車夫の勇み肌  
ネオン街自撮りの背には夏柳  
垂り枝が風を呼びこむ夏柳  
緋目高も一人暮しの友となり  
息潜め目高数ふる指の先

秋山 紅花

雨催ひ何時しか消えし蟻の道  
走る蟻迷へる蟻を導けり  
蟻の巣に矢印順路ありさうな  
友の死を引きて帰るや友の蟻  
径跨ぎ蟻の門渡り笹藪へと

東京 水落 守伊

葉柳や塰ある町に生ひ立ちぬ  
店終ふる老舗料亭夏柳  
教へ合ふ一推しの本夏きざす  
蜘蛛の子や後る退りに消えにけり  
静寂の部屋に目高の気配かな

山口 韶子

罌粟坊主家売の話また延ばす  
雀二羽こぼし梢の花石榴  
山の端の入日を惜しむ梅雨入前  
時の日や老人施設の時間割り  
梅雨の窓細くあけたる夜風かな

横浜 山岸 弘子

家中の灯を消し迎ふ初蛩  
首筋を歩く蟻んこ夜の厨  
梅雨晴や垣を賑はず靴の数  
小さすぎる枇杷は生花となりにけり  
雀の子吾銅像となり居たり

横 浜 川 島 典 虎

丘陵に鶉の高声余りたり  
鹿と目のあひて親しさおのづから  
はたはたの鳴くや仔犬の鼻の先  
縁側に兎と語りあふ天の川  
桃ひとつかじり終へたる口の中

所 沢 関 根 千 恵

夜つびいて啼くは鳥よ何事ぞ

さいたま 白 田 み ち

十葉の白を極めて雨を待つ

さいたま 高 橋 敏 子

夏燕山城めざし空を切る

梅雨の夜ペパーミント酒嗜みて  
弁財天の十葉祈る姿して

雨上る見渡す限り柿若葉  
青嵐草木騒ぐ自刃の地

夏蝶をじつと見てゐる二つの日  
さつと来てつれなく去りぬ夏の蝶

お日さまの熱れ残しあるさくらんぼ

大 阪 飯 塚 智 恵 子

ていねいに洗ふ形見のハンカチーフ

下 川 光 子

青空の区切る枝々花栲

下町の小さき水辺や江戸菖蒲

五月闇音を持たずに風のくる

忘れたる思ひ出ふつと濃紫陽花

一心に我が子見守る親鴉  
打ち水のしづくに刻の止まるかな

山頂に雷鳥の声雲速し  
雷鳥の山ふところに空近く

高野黎明靈気ただよふ夏木立

杉 戸 佐 々 木 史 女

溜息をつくごと夜の水中花

高 原 和 子

雲水を送り出したる夏木立

水中花瞬時に我を虜にす

山椒と同じ色して大毛虫

空蟬や夫の着替へを手伝ひぬ

平成を閉づる日の葬春の闇  
連休長し通夜の灯消ゆる春の果

旧友の会へば熱弁夏の夜  
ごきぶりの不意の出現夫を呼ぶ



田植終へ地球の広さ感じとる  
水打ちて万物息を吹き返す  
来客の多き一日夏ゆふべ  
棕櫚の花日に日に伸びるシャンデリア  
家に着く瞬時に雷鳴りにけり

和歌山 南條きわゑ

新茶汲むマッサージ師の笑顔かな  
地下鉄を出て音高し日傘さす  
白日傘似合ふ友逝く日本橋  
芒種後の田圃日に日に逞しく  
穴子鮎うまし谷中の団子坂

栃木 佐々木典子

四代の元号越えて卒寿の春  
青嵐に腰の手拭翻る

さいたま 川村 治

梅雨入りや傘をさす人ささぬ人  
新傘は二十本骨梅雨に入る

さいたま 松田 朋子

紫陽花やつかの間の鬱払はるる  
赤まんま訪ふ人も無き我が小庭  
公園の散る噴水の穂の乱れ

新茶よと出され長居の始まりぬ  
茶農家をやめし友より新茶着く  
諍ひし母の差し出す新茶かな

残合はす母の日課や夏灯

山戸 美子

留守三日育ちすぎたる胡瓜かな  
履き馴れぬ下駄につまづく梅雨の入り  
照り降りに育ちざかりの茄子トマト  
陽の力たつぷり浴びし実梅もぐ  
物置きに猫もするなり梅雨籠り

蕨 細井 良子

短夜の入ればすぐ出るトンネルよ  
ナイターの残塁に泣く外野席  
短夜のサヨナラゲーム甲子園  
芍薬の無音発破に崩れ落つ

田中 泰子

黒南風に行かねばならぬ予約あり  
梅雨冷えや持病の関節疼き増す  
小雨中紫陽花の情趣満たしくれ  
梅雨一と日気分乗らせて三句四句  
咲きさうな蓮の蕾に夢ほつこり

東京 河原 叔子

雨蛙児の手にちよんと畏まる  
父の日や四十で逝きし父恋ふる  
溶け込んで葉の色となる青蛙  
夏蝶を撮る一瞬は息とめて  
裾少し出すも流行夏の蝶

夏柳銀座らしさの裏通り

さいたま 竹澤 和子

夕散歩琵琶湖疎水の夏柳

植込みの蔭より空へ梅雨の蝶  
路地裏の家々巡る梅雨の蝶

宮代 関谷多美子

スーパ―に車いつばい梅雨晴間

夏至の雨テーマお洒落な講演会

もらひし目高幼子の持つ紙コップ

夜の集會夫差し入れのアイスクリーム  
釣り池にくつきり映ゆる入道雲

水草にかへりし目高ひーふーみー

葉柳の視界の先に孔雀舞ふ

小川 洋子

和歌山 葛城千世子

手作りの夏服明日の出番待つ

一部屋は花器でひしめく夏の宵  
伝達の抜けていぬかと夏の宵

梅雨晴れに皮靴並ぶボンネット

ひまはりの引き立つ舞台や愛の歌  
「愛のままに」を赤きドレスで歌ふ夏至

梅雨晴れの夜空の星に願ひごと

発表会終へて駆け出す夏至の雨

葉柳に魅せられ踊るラテンびと

ほどほどの年金暮し花南風

いすみ 平石 睦子

町田 瀬戸雄二郎

裏木戸を気安く出入り花南天

初夏の風新入社員の長電話  
異常気象取まらぬまま夏來たる

深刻な話麦茶をさりげなく

桑の実や洗へど落ちぬ青春の染み  
ふるさとのあの桑の実はまだ有るか

裏通り夏鷺を独り占め

採るよりも落ちるが多し桑葚

命日の読経洩れくる梅雨じめり

波歌ひ鐘の余韻も若布刈舟

小浜 松島 寛久

青梅雨や赤き長靴たつたらら

さいたま 福田 育子

沙羅の雨この世あの世も笠一つ

ブルータンゴのひと音はげし梅雨晴間  
どくだみは立つ踏まれても踏まれても

経終へば秘仏の睡蓮花たたむ

どくだみを煎じ今年も笑顔かな

天辺に葵一輪海ぬるむ

遠嶺はるか梅雨夕焼の新都心

法堂へ追ひつ追はれつ夏の蝶

墓終ひの報せのありぬ著我の花  
夏海亀の甲羅に發信器  
夏海回収プラの表彰台  
送迎は爺の役割走り梅雨  
最終の免許更新麦の秋

和歌山 高橋満耶子

囚はれし命にやをら女郎蜘蛛  
蜘蛛の巣の傘出来てをり雨の朝  
虹色の蜘蛛の巣写す朝ぼらけ  
一面の葉に守られし蓮の花

さいたま 緒方みき子

渡り来る風を味はふ蓮の池  
蜘蛛の囿や小虫一つも逃すまじ  
精巧な蜘蛛の巣朝日に耀へり  
麦の秋碁盤格子の実りかな

東京 鈴木 和子

初夏の四万十川に八色鳥  
大中小の果実酒の瓶夏始め  
ワンピースをするり抜け行く夏日影  
白焼きの穴子ふつくら漁師町

川崎 鈴木 玲子

久々に駅の百段風涼し  
蠍座の永久の鼓動よ早星  
天を突くメタセコイアよ夏来る  
CMの多さうるさき団扇かな

さいたま 飯田 忠男

湘南の沖にヨットの白き点  
晴れてなほ足どり軽し更衣  
カーテンと同じ色柄更衣  
人の世に整理の一つ更衣

さいたま 武田 重子

水槽の目高追ひゆく母子の眼  
葉柳がつくる水輪や沼の端  
川風に葉柳揺るる散歩道  
蛩ツアーのちらし隅まで読む薄暑

上野 宜子

蜘蛛の巣の幾何学模様雨上がり  
シーソーの側に梅雨茸二つ三つ  
水深く潜む目高の無の境地  
別れゆく日や葉柳の泪橋

千坂 平通

能書を並べ目高の大盥  
鉢底の目高の影とその目高  
夏柳飛行機雲の解けゆく  
本棚に心の在り処秘めて朱夏

石田水音子

天辺や浮世遙かに夏の山  
ニューファッション絵日傘ゆらる外野席  
江戸前や築地老舗の穴子鮓  
「芒種の候」以下ながながと姉の文

安倍 弘夫

夏の朝宿坊の勤行に足しびれ  
杉木立続く参道夏の空

梅雨の蝶薄き朝日を浴びて消ゆ  
旅の朝プラットホームで麦茶買ふ

今朝も又新茶の香り供へけり

梅味噌の一品ふえし今朝の膳  
ぐみ実る父のふる里細き道

仏壇を明るくしたるすかし百合

五合目に縞栗鼠の住む夏の山

天塩岳ランプ煤けし夏の小屋  
日傘の並ぶ朝採り野菜露店前

賢治への詩情あふるる芒種かな

水中花沈みつつ花開きけり

震度五の揺れにたちろぐ水中花  
音の無き世界を生きて水中花

溪流の音静まりて水馬

車道這ふ意志の強さや蝸牛

栗の花気儘な風に乱れけり  
寂しさを水面に写す糸蜻蛉

大ひでり重荷を背負ふ野菜畑

さいたま 野村 美子

いつもの径に薔薇の残り香立ち込める  
暮れ早し遊び呆けて公園の児ら  
短夜や不眠で目覚めしらける朝  
山頂に紅き月あり明け易し

さいたま 高 わこ

鬼石 加藤ナヲ子

麦の秋白内障の手術決め  
梅雨寒や古傷いたむ三千歩  
か細くも蠅螂の子は独り立ち  
立葵紅の二重や厨口

鬼石 榊原 聰子

春日部 諏訪サヨ子

山寺の座禅体験半夏生  
セーヌの花火忘れし故郷泛びけり  
葉のうへをスローライフのかたつむり  
半夏生朝の広場の太極拳

さいたま 反町 修

さいたま 山下ユリ子

朝採りの胡瓜花殻つけてをり  
更衣して燥ぐ生徒ら朝の路  
何急ぐ灼熱の路黒蟻よ  
鉢底に蟻百びきの生活圏

東京 柳父 はる

若 狭 岡本 祥子

鎌軍手置きてごくごく麦茶飲む  
道後温泉上がりの麦茶ふるまはれ  
海も見えつつじ燃え立つ山路かな  
夏帽子大島徒歩で縦断す

さいたま 森下美智枝

玫瑰の蕾ふくらむ即位の日  
屋久杉の命の音聴く夏の旅  
紫陽花に歩幅狭まる明月院  
鯉のぼり男の濃茶席締まる

藤 沢 小島喜代子

木下闇登山電車の先までも  
紫陽花と傘競演のビル谷間  
春祭り木桶太鼓や奈良井宿  
信州路横一列に鯉のぼり

東 京 畑宮 栄子

サンガラスかけて偲びし京マチ子  
今様と店主のすすめるサンガラス  
サンガラス運転多少大胆に  
香水の力を借りて懺悔室

さいたま 長井喜代子

つつぬけの空塗りつぶす青葉かな  
重力を感じる朝や南風  
山小屋の外に出づれば山の音

若 狭 檜鼻ことは

明日来る娘のために新茶買ふ  
川下り奇巖すり抜け山の藤  
夏の雲波追ひかくる子らの声  
更衣たんすの奥に母の帯

湯 浅 和

香水をフランス土産にもらひけり  
香水強き国際線の令夫人  
児の手ひき駄菓子売り場にサンガラス

さいたま 落合 和枝

母の呼ぶ声のしさうな大夕焼  
マカロンの甘さねつとり梅雨晴間  
ポピー手に笑顔を揺らす幼き子  
梅雨曇りぐれちやひさうな六十路かな

吉 川 杉浦 理恵

釣り好きの父の日祝ふ大皿鉢  
梅雨ごもり夫に口説かれ詰将棋  
パラソルを少し派手めに逢瀬かな  
道の辺の小さき花や梅雨の蝶  
雨避けを探すや梅雨の蝶震ふ  
一葉の住みし界限夏柳

和歌山 嶋田 洋子

越 谷 阿部 幸代

短夜の星の交信露天風呂  
咲ききつて雨を厭はぬ鉄線花  
文庫本ひらく足もと梅雨寒し  
残照の庭しらすらと山法師

さいたま 櫻井よし江

蜜柑剥く指にこもれる子の力  
梅の実が子の手に匂ふ朝の道  
公園の古木に陽の出蟻のぼる

東 京 齊藤たけし

黒南風や大漁旗の銚子港  
二の腕の白さ覗かず更衣  
香水の漂ふ宵の銀座かな

キンキンの麦茶を通す喉仏  
青空をつき上ぐるほど山躑躅  
櫓太鼓の誘ふ熱気五月場所

立夏過ぎ水路いよいよ増しにけり  
しくじりの都度増える知恵花菱  
職辞して薔薇の花束初の事

☆

さいたま 鈴木 藻好

菅原 真理

三郷 沼尾 岳

☆

## 令和2年「現代俳句カレンダー」販売のご案内

「東京四季出版」製作の「現代俳句カレンダー」は、以前より水明発行所において取り次ぎ販売しておりましたが、PR不足もあって会員全体に周知徹底しておらず、本来の目的が果たされておられません。そこで、本年より誌上でご案内して多くの会員にお買い上げ願うことにいたしました。

ちなみに、「現代俳句カレンダー」は、現代俳句協会会員の著名作家による俳句や色紙・短冊に揮毫された作品が月ごとに掲載されたもので、日々の俳句モードを高めるのに最適です。もちろん水明俳句会からも主宰はじめ有力作家の作品が出ています。

上記の主旨をご理解いただき、早めにご注文くださるようご案内いたします。

- ◆受付窓口：水明発行所 総務部
- ◆販売価格：1,200円(送料別)

令和元年7月吉日

主 宰 山本鬼之介  
総務部長 茂木 和子

# 作品評

## 山本 鬼之介

形代の燃えて天へと帰りゆく

越田 栄子

「形代」は、陰陽師や神主などが、祓えや祈祷の時に人間の身代わりとして用いる人形（ひとがた）で、奉書または半紙を人の形に切り取って用いるとされている。人の身についた穢れ・罪・災厄などを、神霊の依代と見做した形代に託して祓うもので、一般的には、季語「夏越しの祓」の六月三十日に行われる「茅の輪くぐり」や形代を川に流す「形代流し」「川祓え」で識られている。前者では東京の山王神社、後者では京都・上賀茂神社の人形（ひとがた）流しの神事が有名である。祓えの方式には、上述の他に「お焚き上げもある」で、決まり事「①形代に名前と年齢を書く②形代に己の息を充分吹きかける③形代で己の身体を拭う」を守れば自ら行ってもよいそうだ。

さて、掲句に詠まれた形代祓えは、お焚き上げの方法によって為されたものであるが、神社の神主によるものか、或いは自分の手によるものか、形代が自分のものか、それとも、他人のものかなど、幾つかの状況と情景を想像するが、何れ

にしても、形代に宿っていた神霊が役目を終えて天上へ帰るといふ措辞に、えも言われぬ敬虔な気持を抱いた。野村萬齋が安倍晴明を演じた「陰陽師」の世界に没入する不思議な気分を味わった。

明易や廊下の長き妻の里

正木 萬蝶

「明易」は「短夜」の傍題として歳時記に掲載されているが、単に夜が短いとか夜明けが早いという日中と夜間の時間配分だけではなく、寝苦しい夏の夜から脱した開放感も含まれている。幾つも並んだ部屋と雨戸の間にある長廊下は、何代も続いた旧家の佇まいを思わせる。夜明け方手洗いに立ったら、廊下の奥にある明り取りの窓から、清らかな夜明けの光が射し込んでいた。「妻の里」は「妻の実家」という意味だと思いが、単純に作者の実家を詠んだものか、或いは、創作上の家なのか判断に迷うが、後者として解釈した方が、さらにその奥の奥までもが見えてくる気がする。「夫の里」ではなく「妻の里」にしたことで、長廊下のある家に客観性を持たせている。

せせらぎの風を味はふ鮎の宿

近藤 徹平

清流の畔にある川魚料理の清楚で小体な料理旅館を思わせる俳句である。夕食までにゆっくり湯に浸かり、ほてりを冷まそうと川辺に出た。心地好い音を立てて流れる川瀬を渡る

風は胸を膨らませ、今晚食卓に並ぶ鮎料理の数々が脳裏を充たしてゆく。まさに至福の時間である。

### 正眼の乙女の気合ひ鉄線花

保坂 翔太

剣道には、「中段・上段・下段・八相」の構えと脇構えの五つの構えがあるが、最初の中段の構えを、剣先を相手の眼に向けて構えることから正眼の構えとも言い、攻撃と防御の双方に咄嗟の対応が可能な構えなので、剣道における基本の構えとされている。

正眼に構えた少女の裂帛の気合が道場内に響き渡り、観戦者一同が手に汗を握る。道場に隣接する中庭には、鉄線の花が盛りを迎えている。切れ長の眼の顔がうつすら日焼けし、日頃の稽古で身の引き締まった乙女剣士の姿。鉄線花によって、真っ直ぐで芯の強い心の少女像が浮かび上がってくる。一陣の溪風を身に受けたような実に爽やかな俳句である。

### 月の夜や折戸に光る蜘蛛の糸

大塚 茂子

月光に純和風の庭の折戸が映し出され、そこから銀色に光る蜘蛛の糸が伸びている。蜘蛛は何処に居るのか、そこまでは光りが届かない。静まり返った夜更けの庭の折戸とさらに蜘蛛の糸に確りと焦点を当てた傑作である。

### 舟を押す佐原の風や夏柳

野田 静香

千葉県香取市佐原は、嘗ては利根川水運の中継基地として栄えた町である。昔から醤油や酒などの醸造品の産地であるが、現在では、北総の小江戸とも称され、水郷観光の拠点として多くの人が訪れている。街の中を流れる川の舟めぐりと江戸時代から遺されている古い街並の散策が観光の中心であるが、二百年余前に日本地図を完成させた偉人・伊能忠敬の記念館と生家の見学や関東三大山車祭の一つである佐原祭の見物も見逃せない。

さて、掲句の夏柳は何処に在るのか。言うまでもなく佐原の街の中央を流れる小野川の畔に揺れている柳である。昔ながらの小橋が程良い間隔で架かっており、その下を小舟が潜り抜けて行く。「舟を押す佐原の風」が、演歌の一節のようにすうーと入り込んできた。三波春夫の歌「大利根無情」の中の台詞『佐原囃子が聴こえてくらあー』を呟いてしまった。

### さよならを言つて日傘を振る女

渋谷さいち

筆者の好みかも知れないが、髪はやや長め、目許ぱっちり、肌は小麦色の健康的な日本美人を思わせる俳句である。湿っぽいさよならではなく、明るく朗らかなさよならである。言葉だけでは物足りず、思わず差していた日傘を振ってしまった。実に爽やかな女性で、それに釣られて、相手の男も慌てて大きく手を振ったことだろう。憧れの場面である。



## 上州の風に波打つ麦の秋

原田 秀子

「嬉天下と空つ風」とは全くイメージを異にした心地好い風である。波打っているのは麦の穂に代表されるのだろうか、「麦の秋」は季節感を表す季語であるから、波打っているのは麦の穂に限らず、青田の稲や野菜、そして、土手の草など、風を受けるものはいろいろある。こうした景色は何処でも見られるだろうが、「上州の風」と詠んだところに、自分が生まれ育ち住んできた上州の地に愛着を抱いている作者の気持がよく表れている。

## 麦秋や背伸びして見る海の色

日高 徹

この俳句を読んで、「背伸びをする理由は何か」という素朴な疑問が浮かんできた。目の高さにある障害物を避けるための背伸びだとすると、視界を遮っているものは何かという疑問が生じ、摒その他の建造物や背の高い植物というところに答が落ち着く。しかしどうもすっきりしない。結局この背伸びを、水平線をより遠くまで、そして、海をより広く見晴らそうとする意識がもたらした行為と受け止めた方が文学性が高まると思いに達した。魅力に充ちた作品である。

## 見返りのひと立たせたき夏柳

青木 鶴城

江戸前期の浮世絵師・菱川師宣の「見返り美人図」を前提

にした作品と思えるが、その柳をバックに美人を立たせてみたいという書き方は、「言わずもがな」であると思う。何故なら、風に揺蕩う夏柳の風情そのものが見返り美人なのだからと、少々けちをつけてしまったが、作者の手柄が正直に出ている、好感の持てる俳句である。

## 時の日や指先で聴く己が脈

曲淵 徹雄

季語に付け合わせた句材の内容を良しとしてこの句を選んだ。本句をより深く理解するために自分の脈搏数を計測してみた。一分間に六十回弱の脈搏で、作者の年齢なら六十回を超えと思われる、即ち人間の脈搏が時計の秒針の動きに類似していることを今回再認識したことで、句意を鮮明に読み取ることが出来た。「指先で聴く」が良い。

## 栄転の夫への褒美花火舟

新 暦文

この句の「夫」は、若かりし頃の作者か、或いは娘さんの夫か、それとも架空の人物か。そのような野暮な詮索はせずに句の内容を噛み締めてみた。妻が夫の栄転祝に舟を仕立てての花火見物である。費用はともかくなかなか粋な計らいで、こつこつと貯めていた臍繰りを気前よく使ったのかも知れない。「山内一豊の妻」の逸話を思わせる微笑ましい俳句だ。

## 初恋の味より甘きさくらんぼ

太田 絹映

筆者の青春時代の初恋の味は、懐かしのコマージュに登場の「カルピス」であった。初恋は甘酸っぱいものというイメージを見事に表した文句であるが、掲句を読んでなるほどと思わず頷いた。さくらんぼは、老若男女誰もが好む果物であるが、初恋の味と対比したことに妙味がある。

### その色にニンフの群れを錢葵

宮崎チアキ

ニンフは、ギリシャ神話に出てくる美しい女性の姿をした自然物の精霊で、国によって、妖精とか仙女と呼称されている。錢の形に似た小花を次々と咲かせる錢葵を、妖精の群れと表現した作者の感性に讃辞を贈る。

### 五月雨や十年日記拾ひ読む

加藤でん治

五月雨即ち梅雨の時季の鬱陶しい日に、所在無く書きたためていた日記を読み返す行為は、生まれてこの方日記を書いてこなかった筆者には、到底及ばないことであるが、感覚的には判る気がする。何年も前にその日その日の出来事を思い返すことで明日へのヒントを発見出来るかも知れない。

### 煩惱はまだまだ盛ん泥鰯汁

染谷 正信

百八つあると言われる煩惱の内即座に答えられるのは十個くらいだと思う。夏真っ盛りに泥鰯汁を平らげ、煩惱が減ってゆくどころか、ますます盛んであると豪語する俳句に、自

分も力づけられた気がする。

### 瀬戸内の漁船の水脈や薄暑光

横山 君夫

湖のように穏やかな瀬戸内の海。初夏の清しい早朝の陽を浴びて帰港する漁船。真っ直ぐに伸びてゆく水脈が、船長と乗組員そして、それぞれの家族の幸せを象徴しているように見える。

### 打水に蕎麦屋の暖簾はためけり

田中 章嘉

老舗蕎麦屋の藍暖簾であろう。午後三時を過ぎた頃、店先にねんごろに水を打ち夜の部に備える。水が風を呼び、暖簾がはためいた。何かめでたいことの前触れかも知れない。

### 畳まれし想ひ出ひらく母の日よ

秋本カズ子

毎年母の日に畳紙の紐を解き、きちつと畳まれていた母の遺愛の着物を開いてゆく。その着物を羽織り、ひと時生前の母を偲ぶ。そうすることが、亡き母への贈り物だと思っている作者の心の内が伝わってくる。

### 走る蟻迷へる蟻を導けり

水落 守伊

蟻を題材にした五句は、何れも蟻の生態をよく観察した俳句だと感心した。蟻の行動を熟視していて、人間以上に互いを思いやって生きてるように思えたのであろう。

# 水琴窟

(水明集七月号鑑賞)

池田 雅夫

前向きに生きると決むる寒の明

川村 治

立春の日をもって寒が明ける。厳しい寒の間は陰にこもりがちで気が滅入ってしまふ。そんな日々もやがて春を迎えた。苦境の過去は忘れて楽しい未来に期待を寄せて「前向きに生きる」と決むる」意志の強さが「寒の明」に集約されている。

春惜しむ荒鋤だけの街の畑

飯田 忠男

市街の家並の片隅に畑が残っていると寒がある。農業の担い手が少ないこともあり、多くは家庭菜園用として貸し出されている。春野菜が終わり夏野菜の準備として鋤き返されている。土曜日曜の休日には何か植ええられることだろう。

もどかしき復興の地や蛙鳴く

岡本 祥子

東日本大震災をはじめ、昨年の西日本の豪雨災害など、その爪跡が未だに生生しく残っている。一日も早く復興されることを願って止まない。季節は巡り、蛙の鳴く頃となった。この蛙も災害を深く痛んで鳴いているのだろう。

野遊びや子ら大作の秘密基地

飯室 夏江

厳しい冬を乗り越え、ようやく青くなった野でのびのびと遊ぶ子等。秘密基地といえれば夏休みの感が強いが、早々と作戦を練って作り上げたのだろう。そこには少年のロマンが漂う。野遊びには、弁当持参のピクニックも含まれる。

入相や太鼓結びの花衣

石田水音子

「入相(いりあい)」は、夕暮れ、日暮れのこと。花見のひと日を和服で過ごした。関東近辺の桜の名所は多く、中でも上野、浅草には多くの花見客が押し寄せ賑わっている。車座の客とは違い、清楚な和服で静かに桜を愛でている。

入学児迎ふ教師の白墨絵

武田 重子

入学式のあと、各教室に分かれた新入生。教室には担任の先生が黒板に絵を画いて歓迎している。マンガのキャラクターであろうか。「白墨絵」が印象的。「迎ふ」は終止形であり、一旦切れてしまふ。「入学児を迎ふる教師」としたい。

遠足の列トンネルに響く声

鈴木 玲子

開放的な遠足。大自然に触れながら社会環境を学ぶのである。燥ぎながら歩いていると、折しもトンネルに差しかかる。その反響音がたまらなく楽しく、叫んだり手を叩いたり。

初蝶の五感目覚むる小さき翅

諏訪サヨ子

色、音、味、匂い、痛いなどを司る五つの感覚。小さな羽を広げて体中の感覚を研ぎ澄ませている。和らいだ寒さにようやく羽化した蝶々。翅の乾くのを待つ間に大自然の理を悟り、適応していかなければならない厳しさを感じている。

豆腐屋のラツパ遠くに暮遅し

竹澤 和子

以前は夕方になると豆腐屋さんがラツパを鳴らしながら、町内へ売りに来ていた。最近ほとんど見かけない。他にも浅蛸、しじみなどを売りに界限を回っていた。そんな風情を懐しみながら、ようやく永くなった日を頼もしく思っている。

突堤に垂るる釣糸風光る

小川 洋子

春、突堤で釣れる魚は、鯛、鱈（さより）、鯖などがある。早朝からのんびりと釣糸を垂らし日がな一日を過ごしている。雄大な海原を眺めていると心が落ち着き、悩みごとから開放される。風は釣りには適さないが、「風光る」が活きている。

行く春を窓辺にひとり惜しみけり

寺内 洋子

春の愁いを感じつつ一人窓辺に座り、外を眺めている。力を抜いてすんなりと吐き捨てるように詠んでいるところに心情が窺える。平仮名表記の多さが物憂さを暗示している。

里帰り母の十八番の草の餅

鈴木 藻好

里帰りして母の手料理をいただく至福のとき。その味で育った思い出は数知れず、みんな記憶の宝箱の中にあるのだろう。今村青魚は「ふるさとの母の草餅とはちがふ」と詠んでいる。やはり母の味が一番なのである。相伴にあずかりたい。

芽柳を御苑の風のもてあそぶ

櫻井よし江

「御苑」は皇室が所有する庭園のことで、新宿御苑が有名である。巷の風とはちがう御苑の特別な風に吹かれている芽柳。「もてあそぶ」は、ここでは「思うままに扱う」の意味であろう。柳と風の相性を疑う余地がない。

遠足やてるてる坊主軒先に

畑宮 栄子

学校行事の前日、しばしば吊るされる「てるてる坊主」。明日の晴天を願っていることは云うまでもない。楽しみにしている遠足の日が晴れてあつてほしいと願う子の心情が容易にくみとることができ。これはもう、晴れるしかない。

畳屋に燕飛び入る宿場町

阿部 幸代

畳屋さんの作業場は戸を開け放ち、ときには屋外へ出ていくこともある。宿場町は昔のおもかげを残し、畳の部屋が多いことだろう。燕が飛び交うのどかな風景が見える。

鼓

笛

集

山中順子選



雪溪を下る靈風木曾の峰  
逆転の敗戦投手夏の果  
眞実を明かさぬままに草茂る

青木 鶴城

乳呑み児の新茶ひと匙飲みにけり  
青嶺かな木々に埋もるる過疎の村  
ロマンスの始まる予感大噴水

保坂 翔太

好まざる話舞ひ込み梅雨に入る  
陀羅尼助のみやげ貰ひぬ梅雨湿り  
磨り減りし靴も軽やか梅雨晴間

飛永 鼓

立ち眩みのやうに噴水類るる  
螢を放ちやりたる手の匂ふ  
寢床に就くまでの溜息明易し

曲淵 徹雄

日盛や生徒が作るジャムの味  
空蟬を手に取り数ふ朝の庭  
大漁の小鯔空揚げ夕餉かな

南條きわゑ

春雷や人皆走り出す広場  
春風や異国に残る祖国愛  
鶯の初音に軽き一合目

日高 徹

ウエルダンのやうな焦げ色蒲の花  
藁善くも我が家に罷り越し  
頑としてふた声以上鳴かぬ藁がま

原田 秀子

帝釈天にけふ会ひに行く白日傘  
パラソルの明るき影を釣人に  
珈琲とジャズの間を晩夏光

野田 静香

甚平の兄にじやれつく妹かな  
白浴衣の人に寄り添ふ藍浴衣  
亡き人のことなど語り薄衣

石川 理恵

禅宗の義兄の法事を蓮の花  
京町家漫ろ歩きの藍浴衣  
浴衣着て屋台に群るる親子連れ

野村 美子

花合歓のごとき髪してロツクかな  
万緑や支ふ根つこの力瘤  
妻仕切る芒種の庭の手入れかな

安倍 弘夫

日盛りや鳥居をくぐる寡婦の傘  
走り梅雨職を辞す日の夫の黙  
日盛りやインドカリーの長き列

新 曆文

梅雨寒し見回る畑の草の丈  
南風吹く盆地の底に通る雨  
店に沿ふ古道に洩るる鰻の香

秋本カズ子

海開き外房の砂ひんやりと  
青紫蘇を庭から数枚昼御飯  
浴衣着て銀座に繰り出すギヤル数多

長井喜代子

三陸の真青な海や夏燕  
袖通す母が手縫の祭浴衣  
雷や背中にドンと落ちさうな

西幅 公子

祭り終へ残る五六ヶ水風船  
濡れ髪にそよぐ草の音縁涼み  
竜のごと昇り極むる雲の峰

秋山 紅花

塾帰り友とコロツケ夏の星  
さようならを背で聞きをり夏の星  
山開きその先遠き九合目

石田 慶子

呼込みも鱈背いなせなるかな鰻の日  
梅雨寒に常磐木なほも青とどめ  
梅雨寒やホワイトタイガーにじりよる

新井 孝磨

叢に姿隠せり大西瓜  
百合の香に振り向けば友近づけり  
紅跪きシャッターを切る紅蓮

阿部 幸代

# 鼓笛集作品評

山中 順子

雪溪を下る靈風木曾の峰  
逆転の敗戦投手夏の果

青木 鶴城

標高三〇六七米の噴火は史上初めてである。頂上に御岳神社があり、古来修験道で屈指の靈峰そこに神道の一つである木曾御岳信仰の御岳講の講が結集されている。夏になっても解が残っている雪溪を渡って来る風は御岳信仰のどこか違う風を意識した作者の感覚が鋭敏に捉えている。木曾節は唄うが遠くから仰ぐこの靈峰は登らなくてもすばらしい山である。

今酣に戦っている高校野球。リードしていた九回裏で逆転されてしまったこの投手の涙は一生付いていると思う。スポーツは必ず勝敗は否めないが、そこが人生の訓に何らかの形で働いてくれることを祈り、十代の夏の終りに拍手したい。

陀羅尼助のみやげ貰ひぬ梅雨湿り

飛永 鼓

すっかり忘れていた陀羅尼助がなつかしく、高野山の夏行に参加すると必ず買ったことを思い出す。又この薬は腸の弱い夏の常備薬としていつも携帯していた。そして明世先生も必ず求めていた事を思い出した。一句目の句にも好感が持てる。梅雨のうつつうしさが体調を崩す。

鼓笛集巻頭（八月号）

私の好きな一句（自句自解）

田中 章嘉

蛍来て手に留まるは亡き妻か

熱川の温泉に従兄弟達と出かけた。宿の主が蛍見物に連れて行くと言うので同行、シルエットの中から飛び出した一匹の蛍、私の手に止り暫くして闇の中へと消えた。今の蛍は亡き妻だったのかという思いが胸中を過ぎった。忘れられない一夜の出来事でした。

## 鼓笛集の書き方

- 俳句は四行目から上を開けずにお書き下さい。
- 二百字詰原稿用紙をお使い下さい

編集部

季音抄 鬼之介

百姓の蓬髪あつき昼寝醒め  
久遠寺の鐘の間長し夏霞  
眠らない人形の眼がこはい昼寝  
舟端に蟬の骸や汐の川  
霊山の奥をゆたかに時鳥  
庄内田圃おぼこの腰に蚊やりゆれ  
明易やふとすれちがふ夢のつま  
塩の道抜けて青田の真つ平  
玉壺に数多詰めたき夏の星  
手に青柿投球フォーム真似てみる  
何時か行く星を決めをり蛍狩  
激雷に性根の抜けし鬼瓦  
白南風を通す座敷や江戸切子  
白南風やガラスの船に波の音  
近々と雷鳥を観る山ガール  
生家まで一直線の青田道  
一番星と曳き合うてをり兜虫  
草刈るや海へ傾なだるる千枚田

森 千代子  
矢作 水尾  
山中 順子  
山中みどり  
由良ゆら女  
吉住 光弥  
渡辺 舍人  
吉澤 純枝  
小倉 倭子  
十倉 和子  
柚木 治子  
森田 祥絵  
田中 千穂  
大場 順子  
山田美佐尾  
森川 義子  
井上 玲子  
松宮 保人

次の原稿を募ります。随時発行  
所宛、ふるってお寄せください。  
なお掲載については、編集部にお  
任せねがいます。

▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽  
に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内  
(句に雑誌名、句集名、刊行月  
を付す)

▼散歩道へ身辺トピック

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起  
きた面白い話題、めずらしい経験  
などの情報をお寄せください。

要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内  
(題をつけて)

▼山紫水明へ随筆

テーマ：自由  
枚数：二百字詰原稿用紙五枚半

以内



# 水明抄 鬼之介

形代の燃えて天へと帰りゆく  
 明易や廊下の長き妻の里  
 せせらぎの風を味はふ鮎の宿  
 正眼の乙女の気合ひ鉄線花  
 月の夜や折戸に光る蜘蛛の糸  
 舟を押す佐原の風や夏柳  
 さよならを言つて日傘を振る女  
 上州の風に波打つ麦の秋  
 麦秋や背伸びして見る海の色  
 見返りのひと立たせたき夏柳  
 時の日や指先で聴く己が脈  
 栄転の夫への褒美花火舟  
 初恋の味より甘きさくらんぼ  
 その色にニンフの群れを銭葵  
 五月雨や十年日記拾ひ読む  
 煩惱はまだまだ盛ん泥鱈汁  
 瀬戸内の漁船の水脈や薄暑光  
 打水に蕎麦屋の暖簾はためけり

越田 栄子  
 正木 萬蝶  
 近藤 徹平  
 保坂 翔太  
 大塚 茂子  
 野田 静香  
 渋谷きいち  
 原田 秀子  
 日高 徹  
 青木 鶴城  
 曲淵 徹雄  
 新 曆文  
 太田 絹映  
 宮崎チアキ  
 加藤でん治  
 染谷 正信  
 横山 君夫  
 田中 章嘉

句会名	日時	会場	指導者	幹事
第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミセン (パルコ 10F)	山本鬼之介	茂木和子 境延昭
第二例会	第3木曜・午後1時	本所ビッグシップ	山中みどり	太田絹映
第三例会	第1月曜・午後1時	新宿区大久保 ルノアル	山本鬼之介	五明昇 曲淵徹雄
第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミセン (パルコ 10F)	椎野美代子	境延昭 石井喜恵
第五例会	第3火曜・午後1時	水明発行所	山本鬼之介	吉澤純枝 山田美佐尾
関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化センター	大橋 勉代	森本早苗
婦人句会	第3月曜・午後1時	水明発行所	山中 順子	西山貴美子
若松句会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	菊池ひろこ 石田慶子

## 水明例会案内